

卍の北斗起源説

たなか踏基

先日、星の和名を記し幻の名著と言われる、『日本の星』（野尻抱影著）に感銘を受けた。

私は、モチーフを宙・星にして、四百字詰め原稿用紙換算二百枚程の『奇妙な異星人』を執筆中である。資料を集め、時に取材をして構想を練るのは実に楽しい。取材旅に出る時は、必需品の小型PCを何時も携行する。

七月上旬『宙』（日本の名随筆30梅原猛編）『星座』（日本の名随筆16藤井旭編）なる本を二冊携え、大学同窓会の全国総会参加（札幌開催）のため、寝台特急「北斗星」に乗込んだ。一度乗りたかった特急である。奇しくも前著者筆「卍と北斗七星」と題する随筆と、原惠筆「大熊座抄」と題す二随筆に遭遇したのである。何れも「北斗」の縁であろう。車中で早速小型PCに拙い文章を綴った。

卍は、日本では寺院象徴として地図記号に使用される。元来サンスクリット語で Svīvatṣa と呼ばれ、吉祥の佛教の印であるという。通常左卍であるが、右形は悪名高きドイツナチ党の、鉄十字（卐、鉤十字）ハーケンクロイツと同形である。

東洋の卍由来は諸説あるが、ヒンドウー経ではヴィシシュヌ又神の胸の旋毛、佛教では釈迦の瑞相を表す。左旋回の卍は「和」を右は「力」の元である。欧州の卍は十字架を表す。日本の古い陶器や織物に紗綾形文様があり、卍を繰返す。建物文様にも「卍崩し」がある。文豪谷崎潤一郎の小説にも『卍』があり、

昭和三十九年大映、昭和五八年東映で二回映画化。レスリングの決め技「卍固め」もある。

私が、寝台特急「北斗星」で読んだ卍由来こそ和名四三の星、北斗七星だったのである。天空の梯子降るせし姫川に

四三の星の瞬きてあり・踏基

文中、卍の字形の意味する所は、一般には太陽、電光、電火、火、水の天然物の形と運動を表す説。日、水、雨、火の夫々神の象徴説有る由であるが、私は、北斗の形と回転を起源とする説に強く惹かれた。卍の北斗起源説は、必ずしも広く知られた説ではないらしいが誰の眼にも、卍の字体が運動、然も回転を表すのは明らかだ。古代の諸民族が牧畜、農耕、狩猟生活で、星の推移で時刻、方向を判断し、行事の季節を下したことは論を待たない。筆者は、淮南子の天文訓を引いている。

北斗の神に雌雄あり、十一月に始めて子に建し、月毎に辰一を徒り、雄は左に行り、雌は右に行り、一月に午に合ふて刑を謀り、十一月には子に合ふて徳を謀る

中でも天の極、北極星（北辰）、子の星）を天心として廻る周極星の代表が、大熊座の北斗七星（四三の星、七曜）である。合せて、東西南北の四方位を卍は連想させる。北斗の柄杓の部分は、春は東、夏は南、秋は西、冬は北を指す。史記で記されている「四時を建て」つまり斗建である。卍の縦横の軸とその屈曲は、回転する北斗を表すと共に四方位をも指していると推論している。

原惠の随筆「大熊座抄」に以下記されている。

古代ギリシヤ人は七つ星から二つの連想をしたという。一つは車、もう一つが熊（Aries）である。カリストとアルカスガ、ゼウス神により大熊座・小熊座にされるギリシヤ神話については別段珍しくもない。興味を抱いたのは、北斗が旧約聖書のヨブ記の詩句に言及されている数少ない星座である点である。つまりヨブ記の星の記述は、現代の聖書学で紀元前五世紀頃の詩とされているので、ユダヤ人の間で最も知られている星座は、北斗、オリオン、プレアデスであったとされているからである。

あなたはプレアデスの鎖を
結びことができるか
オリオンの綱を解くことができるか
あなたは十二宮をその時に従つて
引き出すことができるか
北斗とその子星を導くことができるか

（ヨブ記第三十八章三二～三三節）

筆者略歴に寄れば「卍と北斗七星」筆者は、英文学者・星の伝承研究家の由、これは文章から納得できたが、実弟が大仏次郎とは驚いた。「大熊座抄」筆者は、賛美歌研究者とある。青山学院の賛美歌学の教鞭を執る傍ら、変光星のアマチュア天体観測者で、実際に五島プラネタリウム学芸員だった由。二つの随筆を朦朧酔眼で斜め読みしながら、鉄路の繋ぎ目の音を聞き、「北斗星」の振動に身を任せていると、卍の字形が、多感なる日に信州松本の城山で眺めた、また青海の空に輝く北斗七星を連想してくるから不思議である。